

# 三村合同住民海外研修に参加して

大別当 斉藤 美喜子



10月29日～11月4日、私にとってこの一週間の旅は、今まで経験したことのない、驚きと、感動の連続だった。

約12時間の空の旅…。やっとヒースロー空港に着いたと思ったら…悪天候、強風のために上空で40分も止まり、機内の揺れは物凄いものだった。

不安とともに始まった旅ではあったが、翌日の視察で、その不安も吹き飛んだ。

10月30日、ロンドンの高齢者向け居住型ナーシングホーム「BRAY BROOK」を訪れた。

私がそもそもこの事業に参加したいと思ったきっかけは、ケアマネジャーという職業柄、ケアマネージメント発祥の地といわれるイギリスの福祉はどのように行われているのか知りたいと思ったからである。どんな施設なのか、とても楽しみだった。訪問してみると、やはり日本のそれとは随分違っていた。日本の施設（特別養護老人ホームなど）は、どちらかという、病院に近い。しかしこの「BRAY BROOK」はまさに「家庭」、「家」の中に、何家族かが同居しているというような印象だった。

私は、この施設を見学して、日本のこれからの施設はやはり「施設」ではなく、「家庭」を目指すべきではないかと思った。「BRAY BROOK」に入居している高齢者はなんらかの障害をもっているながらも表情はみな穏やかで、明るかった。「家」にいるような雰囲気…それが高齢者にとって、過ごしやすく安定した生活の場なのではないだろうか？入居されている方々も個々の部屋を好きなようにディスプレイし、ベッドカバーもフリルがついていたり、家族の写真が至る所に置いてあったり、かわいい、小さい女の子のような部屋もあった。

日本でいうとグループホーム、だろうか。やはり在宅生活が困難になったとき、施設に入居するそうだ。出来る限り在宅で、というのは日本と同じようである。

施設内は、1ユニット6～8名で、6ユニット。1ユニットで1人の職員というのは、少ない気がした。日本のように施設の中にいつもどこかに職員がいるというわけではなく、入居者が自由に過ごしているようだった。

そして何より施設長のピバリーさんは、とても優しく、かつ、強いものを持っている、すばらしい方だった。このような施設に入居される高齢者は幸せだと思った。

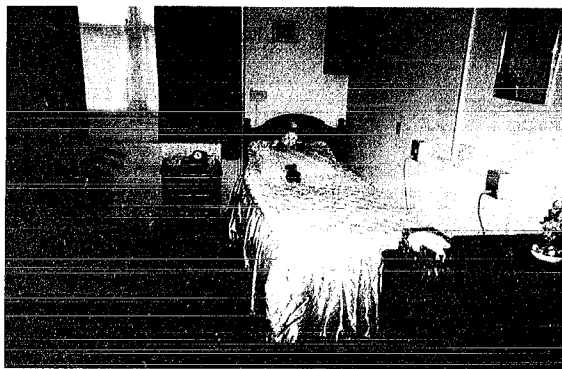
10月31日は、同じくロンドン郊外の英国国教会小学校を訪れた。

学級数は、10クラス、1学級は30人以下である。日本の学校の教室は、1つずつの席で全員が先生の方を向いて座っているが、この学校では、どのクラスもグループごとの席（1グループ4～6人）で向かい合わせに座っていた。学校の造りも、運動場（体育館と呼ぶには狭い）を囲むようにして教室があり、横並びに1組、2組とはなっていないし、日本の学校より狭い。日本のように陰湿な「いじめ」や「不登校」はないということだった。ここでも、日本にはない、自由な雰囲気というものを肌で感じた。

それにしても、この学校の案内してくれたセーラちゃんとローレンスくん（共に生徒）はとても可愛いく、特にセーラちゃんは私の持っていたファイル（キティちゃん付）を見て「Oh! Hello Kitty!!」と喜んでた。ロンドンでもキティちゃんは流行っているらしい。

最後の視察先はフランス、パリに隣接するセーヌ・エ・マルヌ県のグリーンツーリズムだった。グリーンツーリズムとは、農業を生かした旅行産業、観光産業のことである。地元農家のシャテさんは、小麦、とうもろこし、グリーンピース、菜種などをつくっている。村の助役もしているという。この村には620世帯の村民がいてうち6世帯しか農業を営んでいない。ここでも農家は年々減っている。そこでシャテさんのように観光客を受け入れ、観光目的で客を呼びよせる別荘タイプのB&B活動というものがある。また、観光会館では、ビジネスとしてのグリーンツーリズムや、自然を生かした観光など、フランスの観光について説明を受けた。しかしフランスの農家は、北海道のように土地が広く、新潟の農家とは随分違うなという感じがした。

さてあっという間に一週間が過ぎてしまった。全体的に時間が短く感じられ、とても残念だった。最後に、私を快く送りだしてくれた家族、下の子の面倒を見てくれた実家の両親、またこの事業を企画してくださった事務局の方々、旅行社の方等々、すべての方々に感謝しています。ありがとうございました。



▲ BRAY BROOK ある老人の部屋

# 2000年海外研修に参加して

大別当 鏡 文江

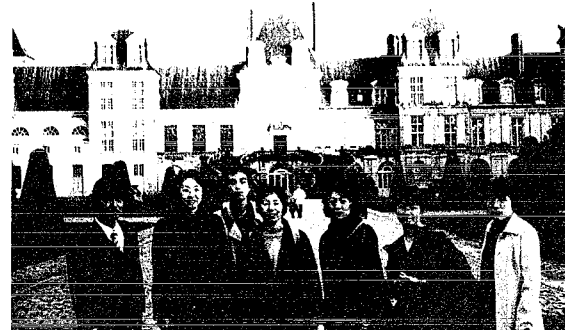


1) 福祉施設視察・ロンドンの高齢者向け居住型ナーシングホームを訪れた。ゆりかごから墓場までと広く知られたイギリスだが、時代の流れと共に経済力の低下や高齢者、移民の増加によって、医療や福祉の予算が逼迫するようになった。サッチャー前首相はNHS(National Health Service: 誰もが無料で医療が受けられること)に対し市場原理を導入、医療経済の建て直しのため荒療治を行った。それによりベット数は25%減、手術入院も待つのが当たり前になったという。そこで労働党のブレアさんがNHSの予算アップを公約に現首相となった。しかし無い袖は振れないわけで、入院費の有料化を含むNHSの抜本的な改革を検討していることが発覚し、国民が大きな衝撃を受けているという現状がある。視察先の所長さんのお話では、お金があってもなくても同じ医療福祉が受けられると言う。(ある人は無くなるまで払い続けるそうだ)なんだか日本とはあまりにも違いすぎてコメントのしようがないが、勤勉と言われる日本人には、一生懸命働いていても同じ将来と言うのは勤労意欲を削ぐような気がした。しかし考えを変えればそれだけ貯金はいらなくなるので現在を楽しみながら生活できるというのは羨ましい限りである。しかし30%近い税金との選択はやはり究極の選択と言わざるを得ないかも。こういう国民性で出来たイギリスに市場原理の導入はかなりたいへんなことと思われる。今後の動向を見守りたいと思う。視察先のホームは、なんだか時間がゆっくりと過ぎていて、バタバタしている今の職場との違いに、これでもいいだろうか？と考えさせられた一面だった。調べでは、場所にもよるようだが、病院は看護婦1人に対し昼4名夜7名の受け持ちと言う。羨ましい限りだ。

2) 教育施設視察・ところ変われば品変わるとは、このことでレセプションイヤーと言われる小学1年生の募集は年3回(9/1/5月)5歳児になってからの入学だそう。時間が足りず聞けなかったが日本のように入学式は大々的に行われるものなんだろうか？また、父兄のボランティアが授業に参加していると言うことだ。あれは、自分の子供のいないところなんだろうか？いずれにしてもこれは、学校とPTAのつながりが深まるいい方法ではないだろうか。視察をおこない、「学校全体がかわいらしい」と言う印象だった。まるで絵本の中のもの…カーテンや壁の張り紙、窓辺のディスプレイ、誰が担当なのだろうか？あまりにも小さいことで人にも聞けなかった。私の記憶の中では小学校での歴史の授業はほとんどない。自国の歴史を学びながらの価値観や倫理の学習は意義のあることと思う。「電話もないのに何で戦争になったのか？」と言う年齢に合わせたテーマになぜか感動した視察だった。

3) 農業視察・グリーンツーリズムと言う耳慣れない言葉だったが、保育園の父母の会で行った、蕎麦作り体験施設もその1つなんだな一と思うと身近に感じられた。農業国フランスでの視察である。農家1軒の保有面積の広さは広大なもので、シャルルドゴール空港の買収は5軒の農家で間に合ったと言う話でも分るようだ。どこかの国とは違うな。この、グリーンツーリズムにはそれをバックアップする組織があり農家の希望を聞き、プレゼンテーションが行われるという。年々増加傾向にあり黒字決済のようだ。確かに話を聞くとホテルに泊まるよりも低コストだし、利用してみたいところだが、フランス文字と車の運転に慣れないことには、日本からは無理があるようだ。フランスには車線がない。郊外線はそうでもないが、凱旋門の周りには5車線はあると思われるが…皆さん勘で運転しているようだ。左ハンドルだし、とても怖かった。どこでも同じようにいいものは高く売れる。広い面積で質の高い作物の管理維持は大変ご苦労されているようだ。希望すれば有料だが地質検査を行いむこう3年間の肥料の指示のデータを提示してくれると言う。しかし、今日本で話題の環境ホルモンなどの有害物質の検査は、されてないようだ。狭い日本ではゴミの問題から温暖化の問題を抜きに農業の未来は考えられない。まして新潟は中国の影響も受けるだろう。チェルノブイリの影響を受けたフランスは、どんなことを考えているのだろう。レクチャー時間も質疑時間も駆け足の視察だった。

4) 帰ってきて行く前は自己の危機管理について耳にタコが出来るほど、脅かされて出発となったわけだが、男子諸氏のおかげで、ぼーとしていても帰ってくる事が出来ました。有り難うございました。



▲ フォンテーヌブロー城前で

●こぼれ話● 昔読んだマンガに出てきたピカテリサーカス憧れのロンドンでも写真は真っ暗、何処だかわからない…

●こぼれ話● 今回の研修で感じた事、そして、今更に入居する高齢者の生活は、想像以上に大変な事だ。